



数

物

子

道平

下





類柑文集下



闔雞之戲玩尚矣李邵之芥羽  
金距之後唐皇盛於此在千傳  
賦韓聯杜律之彙則是戲玩千  
騷壇者而共載籍之所見歷々  
焉我朝雖未聞具權輿堂上  
以及里門為佳節桃園之戲玩  
也又已舊而前記之所錄可以  
見其概也今茲彌生之初  
公筵漱芳之餘取題於此延彼



晉子，襟以從，鞞而恢，鼓俳，鬻或  
有七步而吐，五六調，或有十步  
而發，二三曲，間有執一者，以夜  
既闌，意始倦，而各歇，搏咏多寡  
混合，積壹百有卅，奇而公，裁  
居其半，至於遺詞，名字之競，變  
態則所謂五百兒之羽儀，森々  
屯其中，是所以追於佳節之典  
故，摠於桃園之賀，趣而戲，玩之  
趨雅，致者，歟，逮使再煩，晉子而

後偶立，篇分篇得，羨名而勇怯  
之品，級進退之點，廢判然，破竹  
歎玉，是又可謂諧體之新奇，吟  
房之希珍者，然非與甲申暮春  
下浣百之叙。



詩膏 上冊

一合 左右二字

一百乃餅 白中ぬり 治鶏坊 冠里

忠臣み簾 ぬいぬ ぬ音りれ 掉瓶

五徳乃冠者羽園崩をりつて用い多  
東西くむらし玄宗皇帝乙酉の也し  
三月三日子誕生ありし唐土のとりを  
あつめぬりて七州の幕生さばより  
やよひの餅をあまてふ馳走奔走有  
やりて桃園子堀つりして治鶏坊と  
名つけ五百人の童子守りせらる

日中乃名もその代りしを引と日の  
節會を初りて忠臣の給を告国門の  
夜を司すとる一日の計を記す  
と傳しりて夜の外事某仰せうけ  
ぬりて花鳥の心をやちりけ列伝  
知七十卷の務負記す

凡例

- 一 五字ハ一日長安花のむやうを伝
- 一 所遊よもつてこれを傳の
- 一 三字ハ戴冠文捕距或のこの徳強  
何れとて字面を改む
- 一 二字ハ越雞の雪子散乱一々  
霽毫勢毛乃何れとひり批伝



三  
三  
三  
當時ハ形の点鐘用申へられも申し乃  
昔のやうあまらりて禿尖の力合合はり  
一生變りの假名を正し所生の實名を  
こららり一季くの名はひらり  
珍禽怪鳥の品を定むりてと徳書の  
大寄なれも何よりふゆり海くても目  
くれ心もみり是も知能のうくし  
てもも有ぬし 亦くやりの座  
赤宵の身三十五谷をのりはれ廿五合  
とす小侍佐のりみかおの尻いつても  
おすれある方人なれも則二巻の巻号  
とて物加和の巻人筆とりて

二合

御簪すて撮<sup>ミ</sup>かちすや 花冠<sup>リ</sup> 百之  
戴冠文とて

たけあまやとくく 啄目<sup>リ</sup>の南 星  
捕距<sup>或</sup>トス

左の座は着らるる大臣の多し能  
距<sup>亦</sup>爽下ふらるれり宮義  
花冠トサカ朱冠サカとあみらんとあ心  
あは是を文とて左に或門源平乃  
或備り右の座につけてて羽翼  
あつひつくりあつくり 是を勇と  
すはあふ初らとあはしはつら  
文武兼備して太平の時を唱ふ



三合

廣庭より風の舞尾の進み外 雪花

し字とく

叡慮もしすすくあま志賀の種 里

五字トス

風波ともふ揮<sup>ハツ</sup>て花もうちむ乃漢  
論をとりまほのてり尾も尾もあひ  
つせりも辛合其争ひ君子の名もい  
上下の貴賤あれは是れとあしりるを  
もせぬゆるう心ある者よてはくくの  
技をわて右へはくをせられり

志賀之助小上こそすまの事

四合

炭吟の走るふもく世初らひ外 音子

し字とく

十月は初日てあまの月と孫生丸 里

二字トス

豫譲り昔は追てけりぬ餅とく  
真魂此名は化し多難を報へけり  
丁て蜀魂のちあまのあまの血  
啼のハ何く寸相も血も鳴やれ  
し九八男の海り初園のこまの各將  
鎗下の名も晩世まひりて其月  
真ノ日と時をちくせして信あり

五合



漣増り汗を志つじ羽伝うま何虹

し字あま

介距脱て未あくうやーか 星

同

只白旗まつけとの所詭宣あまうとも  
移るうひをぢまうせて持現の所  
前より赤白の務負せよ赤キハ羽も  
うすすとや其中ふ搗屋出の上白と  
名あて七羽の中は大力

ああもこれはほきうり

六合

弱多やこを兼仕りもくひ退 星  
し字

莖餅けよるまうふ省ーり習魚

同

遍照寺のけーり法法所法とあむて左  
を抱へて速へるふ衣あかされて唯ハ  
のいぬとあーり日比法をを詞あつけ  
て怒りまき罪つらりきるを大雁たの  
筆の終ーりありけれも只と貫いさ  
ーりーもあ末心とあー

黄莖餅まうれ盲とあて存鳥骨終丸  
と製法せーりゆめあて婦人  
虚弱の力と成るうこれ雅り力や

只今の手柄了を命真加あま  
七合



三  
砂渦やつよのきりあを 一規 里

五字

毛衣子 腹黒き名を雪めけり 晋子  
しき

依の未孫朕太郎と名あて立白子上り  
砂水子むき入むるの羽音と陣比  
類あり 右の名はくつるをくても  
あられす骨を鳥武者とくつるは指  
さし(せ)は瘡の毛衣けりて今替山  
小徘徊せしうを忽ち其耻を雪めり  
け後薬劑の陣はをむ(う)に

八合

扮られて毛足を松の汁とりの事 白梅

遠く蔭ヶ梅の下をむ鳥乃米 里

左右し字

志賀の関脇唐崎ひよつ松くつひはし  
けをい今一 ぼの色あさりり梅は  
方より 風あげを梅乃下をむ庭乃乃  
上毛子花をちりうりける昇殿乃  
ありて歩階は近く賞覧せりきり  
鳥宦源の仲正の扶持すまよめり  
松と梅とれ中よりあれり 昔  
扶持をやるるをきりし物の春病沾

九合

比首尾を狐をりて 歩前 負 里  
二字



喰抜り羽實檢や路次のもと志水  
屯

さんくの首尾昔男の名もほれりくみ  
ぬ才羽羽帯の手本と成てうつらま  
な才のありやうつるせなる恨も然ほ  
る所心より味負成(下)の瑕瑾  
ももあらしと名より力を付てもうひ中  
り

十合  
名系せん三枚朱冠をこつサカの山 里  
二字とす

あつ勝國鷄野の筋と召れり習魚  
乙字  
巖切左右へこそあげ大お緩つるこて

ある有様三ついさりの見参とし三番  
うつ三代山と名系角あるもの角牙  
あるあつ牙見りくまは國鷄野の  
あつも入りしけの小掃もさるあ  
来りりりとあん津玉乃しけ昔  
黒主鹿をゆめりりり多野と名付  
古言つる國鷄といふるふ元合り  
一作小錐目まんね

十一合  
勝く魚薩摩あおぬて扇る 百猿  
左右乙字

入首、胡椒路巾の羽ゆら  
小勝く守れる者汝ハ丁の勝夫と  
里



わあしり破れりあまの時又破楚の大  
元帥と記されりるるをさる才ふじ  
仇立りり内服へうつて扇長の火兵  
琉球の厚胤薩守我有といひ  
隠波北小島の荒者之珍槍りの上  
はつと入所をさるるへうり  
むしし才如椒軍一う家

十二合

裁片けの足又覚悟や一雉一囊

辰下

し字とす

取放し佐理のハゆくの合せ牒

里

捕距我トス

たちつけの辨甲舎りるとみしり草

足とのせりあひひちり引くめをまぢりさぬ  
右も又八くもくらもこ佐理領舟櫓より  
おて標面子合せその敵極すり侍るふ  
いつくへ取逐しりともはるも鳥ハ  
無し亦元離とのあ用をとあるるよ  
ちり放しりらうせものゆはり  
味すもきりあうるあれ心も改すり  
孫と作せりりて序廢義よりり  
一扇をゆるし

十二合

里

音ひたう係東合や羽衣乃曲  
柳り樹をつつと合せし鳴鹿りか右此  
た右二字



吾書合の由流音をたると乃の字  
ひらく寸羽の目にはす波を宗乃  
しらのきまひてまいつる合せるあり  
両岸の柳乃みくら東の西の片  
を遅速はく寸其羽其尾とよふ  
凡流陣

十四合 右 二字

晋子

刻して入るるみむ冠も箕手外  
距の筋の子はあこまり 小屋 雪花  
ふらふの也すひひりやほむ物箕乃  
かろ砂すくひああるくすす  
志や乃み藪ふふのほしてあつる  
心ゆくと其せきを鵬雛乃奇を

ありは沙千の小貝をりる拳子のせて鴈  
のほし花冠はくく唐千の米ほと  
十五合

角も一や三合凡の弱くろる 明言  
屯

とつむすみ植屯乃凡や 要石 晋子  
乙字

凡子の字理して進と出るるよ力  
定くはして勝車とみくり年の功  
れく執りすくしるあ石四結を亮て  
ちつとも動りに神の力乃あらしむ  
荒言を  
十六合



支毛ちりく漆ぬりまん 惣あさり 雲花

し字とび

油符 狂翹合せととゑ 志は次抱 里

半面羨人印

大黒屋の塗桶とへも大津子隠を  
のれち投あし口をぬゆつて大坂に  
濡髪いつきも支毛をきく名をこ  
る家野のこあしおのをのりかき  
似せしものぬめるとちこれあけ  
あいらん 嘴太をちさむく魚  
節含み召れけりとり 枕九席と段めり  
油室の將軍三郎との鳥帽子揚の陰に  
泊竿お旗さしあげぬるふちり

ちりく推参しり 調の二はあよとあを  
されせはとり 天下一

十七合

大鋸の血ハ涿鹿よ 戸板楯

毎雨

左右  
二字

次田町ハ茶虫 ちりや古戦場 里

ちりく ちりくの壁 古戦場を飾りて市間  
み戸を身と巻く茶屑を掃き其代の  
窮鳥ハ寒夜の鼎に煮られし乃世老  
圖雞ハ温光の庭に肥りむし持とび

十八合

ちりく ちりく ちりく やそ 舞のり 里  
二字とす



琉球の神子小油や深あさん 立朝

乙字

帰國の沙土産やして言麗のオカ羅乃  
と多十つ十をかかたぬれり村里の時  
を報して此調の乃とていふ其申の  
牛と以てそくハ唐猫多し羽毛を膏  
うらみのて黒牡丹とも申しこれ敵乃  
鉄嘴をすへらけし剛啄の力をうむ  
はんとの討てもさるるををしこれと  
かゝらものありしよけをされ侍と  
十九合

左右捕距並とす

ゆくり躰や目一枕ト十三羽 素琴

半塚のよつあむ所を二けつり 星

形容嘴羽飛鳥のうけをれをく  
れりかの小男といへ今らるるの寸は  
一の筆を記す右ハ雄雄の中よき  
らしをへてそりしを念ハとありや  
つゆ鳥も心をうらして物子感する所  
時子とつてのちん氣聖聖の大きき成て  
はけしき多ういへりはててと紫  
紫を分つゆとと流田山の錦羽成  
ひるりして名未代と有る乃

一番終と記せり

井合 左右 二字

負イ廻イく逆イ摺イとんと切戸引 欣以



風流を務テ大振羽の黄彩カニハツ唯ツキ 里

紫雲の景因ウ紫先を何アそよ一二の  
うけニ番終と評定し侍りニ字ヲ云

勝浦の目出度タ名より揚間陣も  
ちうされぬのち十八九斗ある女房の  
大なり羽をひろびろして陸カの与一を招  
きしゆとひひば扇を封フりし  
舟フネを多タくいてかめものも  
廿一合

鬘毛マユや瓦ものイるを乃紫ムラサキ 洞滴

目包メノカのいイきもくや御奇ミタマ笠 里  
ニ字と云

と日とつうせと花ハナつうせとあしあそむ  
くら甲カウと朱冠アカカ尤トしシら老すあのみり  
その紫ムラサキと御山ミヤマくれぬともや  
名登ナノトの箸シヤウ磨マをヲ一ヒトよりひく合アヒせ  
片カタ々々小侍コサマは目包メノカもすくとト雄  
なれと心ココロをヲ下ゲり出デをヲあアんンとのノり  
みヤ笠カサをヲ敲ヒりておオのノりリ

陣中チンチュウのノこコかカをヲせセ侍シるル一ヒトのノ計ケイし  
廿二合 里

尾ビが裁カの掌テノヒ心ココロくクせ初ハジメ合アヒせ  
五字 里  
進む氣クミの鑪ロ子コをヲメメる板尾イタビし 卍マン芝



二補の昔阿あうれとくふつとあひ  
より鶴鴛霊鳥とと重祿やうる雄  
唯こいあし交合比翼のやうちもな  
御く長しと鳴尾さうら尾ま尾  
う魚てありあれをす其すは男色  
わけあまひはし程あく血氣壯は骨  
たくおと成て初生合機の心はしを忘  
あうり掌好くすうとくは日少幸  
の春を惜める思ひ深察すし各は十六  
とろや初る合く枝尾の毛按合する  
進退節はあしきりといはも進  
氣あゑをれとと  
廿三合

羽さけひやうれもあうら 菖蒲草 星

五字とす右二字

あ白も紅の鹿子乃くうらふ 言志  
先年

白鶴の碁石子あぬ菊のつゆ 晉子  
けあうと抜群をれそ懸るをを  
あうり有信黒毛は白のさうあ  
珍くおす者しをあれう曹へるは  
さうあ葦子あうりそよりして八幡黒  
と名あて務負すしとあ下知子付  
けりの水白ハ味方の交り毛あうら紅  
くはあさみさうら右子付しと引分  
うり羽味遠鳴りて面はむらあはる







分らむを搦をほろく阿まり外 幽洞

右屯

捕、後、それハ雉とそ二ヶある 里

以るゆゑに風をけしる合を分  
て曰うた世の陣は傭を呼一羽を揮て  
拵れしと世衛との糸拵これと  
拵るゆゑに世はうくれうめて尻を  
せ一雉といふものの詞と臆し今  
一番ともいふとみしけあすし乃  
をれやほろくは是れをそとく後  
ろ筒はくきすしとを

サ七台

炭桶へあけて物をし 固炭朱冠 笹分

甬利乃弓多く海らる 地すり外 雪花

左し字 右三字トス

たぶんとりも一名のし神多し法楽  
と物多のし取え本在御あひあり  
地摺ハ敵をういりりかあて息次  
の功者しうれと志にむろくす尻  
志しりて物をく炭竈をく連り  
志にし扇いて一枚の礼物

廿八合

伽昆且の尻は蒺藜くるものれ 百之  
し字とす

バアカとて初め笑ひり 多六物 里  
五字 實長



天上の麒麟人中の鳳凰とらふは俊傑  
の言才をばすしカビタしめとらふは  
俚侶乃らりあまをかひるを荆軻うた  
をわくんで敵陣よりあつてはつと  
つわうく本意をたげすてハッ割り  
さうれ南蛮料理もあうとありを  
バアカ文字は馬鹿とすゆらひり  
ておれどもたうち笑ひ遣しもことりり  
睥睨ハゆらぎの釣糸よ似て上ついで  
及らう起すに不測はまて力あげ  
アとし唐角力のまより我々のるハ  
そのうらけるハ逸物とてとて桐干  
ゆらぐとらうらうらとていをば

七九合

星

霄啼や名をもを井ふ二日月

戴冠文とひ右屯

毎兩

尾師片くく虎や栖ん東天光

雲にし月あけしは日の色ハ雲の  
牙の雁あの中乃緒を刺しり言者  
を志して明日の心うけとてあいらり  
おまのとりても双ひあ身の時をば  
すさうらりて感せしき  
いさめゆらふ勢をしのがすいさや  
雄之虎を養ふのうらけを用ひて  
高色目さゆりくはれさも  
右ハ膝をつき左の袖はすくはり



三十合

食は汁冠者う世後と 額エリみくらぶ 星

二字とん

古埒の奈良よけやけし 發束毛 白梅

し字トス

鼻よりすまのうはち命くりやを授て  
志しりうほと各初くも是よ思合て  
ちのととも油おちなくや 字彙翁字ノ  
註ニ翁ハ鳥ノ頸毛ナリ亦額字ノ註リ  
本ハ翁ノ字ニ後ニ頁ヲ加つとみくらぶ  
しりきりしとてそのエリモトとちもく  
けあよてくらぶをうけくらぶ神代よりの  
さうとくいつよすくれて花やうあつち

古埒の毛うまびら出立とこしあつち  
廣中くいはくく大衆ともの東家をお  
とろししとく声 ちあはる矢の古す  
宜しとく結い合とあまよも  
あつちみくらぶけらもやうりそ双し

卅一合 左右し字

毛車乃力ちあき力如 籠カゴ毛カモの 星

師鼻負下艾うもとの 鷄の毒 九月  
毛車のおあまもつとよりて物れも  
ちなく喰あせあつちあわしける哉  
車梅いと名付くらり是ハ侍宵方乃  
上藤のよよりむれくらあひきう  
鳥く時あく片方よハ恨のこあくし亦



月あそくを思ふあそく羽利是大切  
のかすまのよちをよしやうもとへ乃  
はういさるまをしうした右勝負をし

三十二合

切声や背を三ツ伏せのいきり物

洞滴

左右二字

志やくりむせや中矮翁をけいり 里

三伏のわりを中れ玉うつともりふ  
へき利口のや合針穴免毫の争ひ  
精神をこししむ是座をすまの  
の随一とす

こつ指をあくらせ七尺の屏風ふ躍り  
片よよのすれも四面の楚歌よ舞とせ

やひくしや中或きの日よあそひふ  
説もある面白し志やくりむせを  
おむすやあそくを小腕の勝負あり  
やまたのそりや筋や狂作

さもいりふとやん

三十二合 左右二字

歌りて十日坊主や桃く裡

里

老鳥のくよみやを固本丹 晋子

朝鮮国子沙門あは形ちんありやして小  
はしき人を皆雑僧と云り吾毒も  
鞆三たあう哥の南京吉兵衛り踊り  
風流も其形似るる級こは十日坊



はふらふらものしありかへり老より  
資朝つよこころとくおもたれ侍る嚙り  
悲しうしはれとて世の思ひ出る  
はやりしてあそとんさて伏見本幡の  
瘦る所居竹林の祢かれる時とて  
巢守子の親を好み猫悪いと叫ば  
其日の遊兵を催りけり仙源のあり  
あやき白刃を波葉よ歸て樂こ  
寝りけり

卅四合

左文右武共三三三

大玉子 源平 香乃 弓 弓 弓

呈

義の端の蕙る思ひを馨より 習魚

酒ラ般若湯ラ雑ラ鎖サ菘菜サイとひひうては  
出守のうし冷すを東坡居士暹  
ととらほし長暮ハ襪 ちとり子ハ襪  
鉄炮ハ河靴暹の目志暹唐名暹  
大玉子暹の近來の異名暹ては  
親仁暹の香暹相下暹は  
相詞暹源平暹の親志暹  
此れをひのそめたるれと母暹  
まもひの志暹親志暹  
既暹夕陽西暹の如暹あり  
こりく投上暹或ハ義の内暹仕暹  
きて大石暹の穴暹を暹日暹







春暖雨炉子坐の吟とて

雪乃燈をききまきまき其角

夏の柳先花散むす小候同

あまのそと花結れ水従かやん青流

海黄あつ色の白ひくくねく同

花も煙ぬひるも梅もあつしき角

風乃しけるる留此番よ水流

鳥の鳥大も外もあやうて角

潤りまよく新をそくく流

あつはら花まきあまあ九条寄角

一帯一亥の刻子昔子わつしきけきまて

わつしきねあまう生前あは免乃の吟

か白いま思ひわつしきを思ひくく

るれ秋乃氣沢感一未乃白子毫溪

禪師の九条寄水雞子一夢まのつと

子海ひ一水中の天れ一句古今符節

乃熱をつまぐ屋果落月此即あは

子石友の寄つと海思ひ出し一亭あま

志ねあまのあま

青流

追悼之句聯

不分次第如左







世中沈沈は路ありて乃極うな 沾徳  
 神むの的をけりけり神り 桃隣  
 多んほや路より馬は皮さへも 神叔  
 仰光や香土思乃玉あそひ 周竹  
 のそむ時悔くぬ新やを此株 立永  
 あ乃悔うは夢を平乃下極り  
 うら終けりや

琴をこぼハ起ぬ 柳三といひ 格枝  
 柳りくちこそそ人もよここ 秋航  
 似借れ力物 一や麻乃角 枳風  
 風流をそぬきの花を惜す  
 今といは錦繡の人よあをき 千山

む星らとらうちあて物は一柱 朝更  
 花つらや槐安園乃ゆさ於園 帝令  
 風祥はまふらもふかいつのふり 吉吟  
 孤王方探れ

ねいふ系物まわハ一指頭 百里  
 うは麻の角あちわは潤うを 仙化  
 碎けの黄鶴樓も極乃殺 白雲  
 苗代り口漱 一はゆくまよ 海通  
 うらうよ骨や新系はまの包 巴人  
 春ぬり綱の鳴乃なむこころ 我常  
 ちるのこいよと峰もうつり 千泉  
 藤よもゆれ常あつと昔は決 同波



あつこちをうらむといふもさふまのうらむ

ちねむももとのま下や小不皿 干江

号成中おまをや假もころと 甫盛

あはつさを洗はてそり日ハ三十日 新真

文うさ乃そハ好きくく出第 烏桂

いつ甲る空の名おまをいふれまを 功悠

おまを注尽してハ眠くお 受松

おまを吟扇乃得もりくくお 石雲

うる房をまおいつくよ斤使宜 芝筵

珠おともくおてお暇や梨の花 仙芝

雨をうらむ君うらむあ千里雲 指馬

茶子恥して師はまふふをうらむ

今ハあしをうらむももさふまのうらむ 渭北

別ニ干東茂別後其角不相見三年

今載三月清流之寄汗簡而傳角

七生別猶快々先別復如何嗚呼

角独歩俳名在惜其有器不展齋

志以没鬱々郊魚傷此 大坂 才齋

草お芽何れそ拂くや鹿の門

あつこちをうらむといふもさふまのうらむ 其泉

あつこちや匪乃中くく虚栗、以齋

あつこちの趣うけくやうらむ房、風齋

あつこちをうらむといふもさふまのうらむ 花齋

あつこちハ風あもおまは風あも角、三惟



田舎よりまゝの晋子身海ありき  
あつて三月末つゝ江府

田里升堂のそと

股引て立ちあむやまはく  
貞佐

あをまお二月廿日死す  
昌貢

舞臺乃遠をちりゆく  
葉花

ちねややい豆府も表の  
在長

甲る居うき世の閑を何と  
文筆

アまい價乃美見河むれ  
寒玉

なき人の筆をあつた  
刺李

その角を為して鹿も衣なり  
常和

ふハ鏡海を燃つて居れ  
羽光

石字やらゝる名を彫る  
楳 鬼株

寂光平右形よめる  
松のふ 是楳

あはま子松やも  
金をぬれす 芥柳

あらくよまら  
摺さし 省示

きまみまら  
あはれは 志鉄

アサのま  
あはれは 嵐水

七尺を種も  
墓乃あはれ 其裔

あはれ  
あはれ 其裔

あはれ  
あはれ 其裔

あはれ  
あはれ 其裔

あはれ  
あはれ 其裔



羊力カクツ年

れまはぬ鳥の引くを二月を 白櫻  
隈刷毛はま子むしのぬ戸くを 毎雨  
根灯や山吹きくくわさる川 右此  
為まも子森はぬもあふ家は園 立朝  
ち柳や水はとまきく月つぎ折 百枝  
鹿乃角は鑑をくまこる引くな 馬子  
泪は子漸くくかた田隈かれ 炊以

曾子の羊束もあはせ

いへるえよあゆめ 折千紙喜乃虫 百之  
蘇井あつてふ切やむの掛曼 習魚  
之いへるのぬハ角也口やま 志水

晋子の琴はあつてはをくせ乃ま

真一とよ風粒のうらうまはくくくくや  
あふ限あはせくまきあふあはせ

初さくくをくく一色一琴乃結 花月  
陰骨は跡」福をくらけ旅う子 雪花  
秋乃深もあふのくや夕干山 洞滴  
之は家のもぬけぬや袖はぬ 白燕  
うは人のまは家もむ乃のく子 辰下  
土は黄ち穢まの向や茶のあ、 笹分  
的月甲部はあふもまをく袖は丹、 篁口  
迷ひ子の位も子結るらくくく 鳥道  
月をむくくハ然は塚のく 掃尾



一寐入してうらむる春のぬ 里東

まの浪花の状をゆゑ

大坂

記念をも岡や東風ゆく松の音 北方

涅槃うら十五日わたり中角へ 岸紫

馬也かこころは歎き子とあはれあり

いそぎいやくらゆ

北もこの所ことあると雑の中、文十

この位をわを相ふそ落お産、車庸

白朧乃いつを昔と井のひしよ 芙蓉

諸白よ昔もつこけのにはさう 雷記

岡事り泪よなめてけるれぬ 嵐水

金録の團やうらふ所あり

ちいさなねせまよひくもあはれ

あつの人をさふ物うき江よたて

晋其角を道程をぬるあはれよま

つよ高名をぬるあはれをよとら

ぬるの惜むししし飛因のほらぬ

をぬく物は女のすも人せめて

つらうらげ

大坂

あけの清ちの富士は片相子 来山

清新後逸子あはれハ死も休ませ

とらうらね心のすもをひくこの人

よあはれ

他の身と尋うれば匂もなるる 青流



衣の袖上は蒲団のしほを尻と  
子を起しし人ももてし家も  
むふし

親も子も同一婦人や別き妻 秋色  
晋つとく名ハ新つとくさゆらよ追き  
比乃判子あまの海川とさふふい月  
思ひあはさるやさつと川とよあつと  
早竟廣漠野の牛とをしして廊菴  
り月鞭笞やあめん因縁あふし

そ何有は裾とれたた條わりの川 沾洲

密永元 甲申文月十八日ありしはあふん

我菴も勢田乃めぬは刷毛序

是ハいつりの清くなる我切字あをそつ  
やうやう韻要をわしし古語の例あふ事  
とも訂出さしし清くゆめゆめあふひゆる  
しとやいつ乃解作を出しては不審を  
いしなることむししはそそはよこハえ  
ともしも隠言して是不測玄妙の女よ  
きんしといふ

いふ言を傳はさぬ

いふ言を傳はさぬ  
あふしる言よつとあふしる言



せいのめふとい

あめあめとる心とてくさきつ

夕年のわくふあ田は長く

去乃國は備後西遊と心裏よりかへ海へ不  
精土いんごり刷毛席せようつはあつあ  
くまやあんと自問自答はらうひ有心を為  
の轉輪精神登得を色乃風系とくくく  
まはらうまはとくく世に暗中現物をくれ  
神句の却く石山は石乃心よあつとあうこの  
水相り親表くく管神無準兩聖乃  
交感あめらうくく自現示れ聖心はあは  
あけほのよあうは

右瑞想圖乃りと衆侍坐地的出趣答  
りよるるをあつとむるころあはれ  
かりあうく草稿と俣うむりあはれ  
はらうあうまを揮ひゆるす

晋其年

一朝の夢解らるるあつとやく夢中  
空と多月の中風掃く清き海に  
あ相り甘ゆきあつとあつとあつと  
を自由を毎く自在を迷うの夢裏  
あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと



百韻

冠里

花の雨袖を板間を裂き

撫さるゝとて母顔百もく

登りハる糸共ありは思ふ

直を流いと趣るすくは

次汁わらふとて雲あ

かりうまのそこ糸筆白ふこ

い月まこの松傘とりつけて

平沙日暮ふるハ足之輕

秋迦飲雙二寸を秋乃肌

いれとるごとくお領持揺

秋色

嵐雪

松風

岩翁

清流

千山

大町

山峰

一雀

河骨れを信ひ子腮上く

加の庄の後お所汁おるす

藤衣おもひ袖一うわすはあ

妙をうと名てそハあんあも

姐板よおハおりくさるのさる

是ちらんいと三上り吟

取あれん子向子なりくまいちこ

涼ききろふ信一隣

なつう程の篠りまは笛もく

ハハ神も神を書子色

明月ハおぬ合点よてそるあ

神ハ何とて軒のあをね

朝更

序令

百里

白雲

風葉

我常

周竹

仙化

立永

立朝

桃隣

指馬



雪の留や蒸れ秋は雪籠りけ 沾洲  
 仰よつらく登中乃馬 済通  
 川の如き多よかのひめをこよ 菜花  
 津の立をよめて新くわーな 寒玉  
 紅顔も紅井峠の吹とろー 文竿  
 裾乃唱日ハまのも終る紀 到李  
 老の雪好十一所、ゆるとよけと 仙芝  
 五山いつとと大釜小椽 重盛  
 借根を二月子也に雪守るん 鬼株  
 骨をうけて廻る剛札 同彼  
 全群ハとて出て四の序 沾徳  
 名のみさ蔓御前子也 執筆

たへ々神代の月乃花るる 青流  
 を命をちめて度は身は秋 嵐雪  
 ひる新よ今も大方三ツ籠子 済通  
 四角用十人子、北州をこる 立永  
 橋の舟袋ちりける三輪の曲 序令  
 てとめんていこ 鯉ツルコもあれ 沾訓  
 通よこるとふいまハめくる 白雲  
 すくぬやうよ石臼をふむ 周竹  
 舞衣乃よふくふまこつ 柘風  
 傳愛の具見東帯してまる 沾徳  
 まつあくか夫婦ぬつくけを籠 秋色  
 秋もろろ能は髪より、櫻 風葉



連雀乃紫うりよ下らん  
 伊丹の玉乃月如弱り  
 志那若子かけそ思ふむの波  
 三 雛おひひらとてあしやの  
 出たらしふ言葉の市ハヤ如口  
 三 雛およゆれ後乃後梅  
 中又序山の志那アサとふむ  
 三 猪所の新茶子千木の逼迫  
 三 程ふめて綻ひさう守一あ  
 三 志さも千うぬる強子脈巧の  
 三 饅頭乃田舎とくく日ハ十日  
 三 志むあさちあ世同りこま

車盛  
 仙芝  
 周竹  
 百里  
 立朝  
 桃隣  
 指馬  
 文竹  
 同波  
 治徳  
 寒玉  
 清流

夫字も借まてく竜の参ひそ  
 三 思ふ方へと控れ鷓鴣一班  
 三 塵ほども伊達ハまらぬ茶於日  
 三 志田を給ふ指千入月  
 三 淋しいをさうさるも秋  
 三 志那のくと居風呂乃経  
 三 面白し如来の志を寺とり  
 三 車乃志と給如指一取  
 三 祝高て一代あまとも日よ白ふ  
 三 中判ほふ志を懸けく  
 三 い(う)こよ内乱おれも後通  
 三 百合の志千も我をとる

到幸  
 指馬  
 桃隣  
 序令  
 立永  
 立朝  
 白雲  
 風葉  
 嵐雪  
 仙化  
 沾刺  
 周竹



肩衣海客留名 宿松の枝 枳風  
 九軒のそと 念入 枳隣  
 金耳此處 片思ひ 沾徳  
 月と 舟の如く 濟通  
 餅の 角の 秋色  
 手招 格枝  
 洛外 名 枳隣  
 名 寒玉  
 後 秋航  
 破和の 負佐  
 前 音流  
 草 沾訓

見乃成ニ寸 延おひちち 仙芝  
 物と 秋色  
 計と 濟通  
 一面 寒玉  
 合羽 沾徳  
 八町 負佐  
 名 到李  
 白 格枝  
 我國 同波  
 宿 沾徳  
 門 文筆



山曉ハとく々 唸波と思ハる 秋色  
 鼻ハとく々 既も活き 清流  
 書れ目の州名ハ 五年指 貞佐  
 浄ろとよ金入て 閑世も 仙芳  
 住吉ハ 矢見の 女も 乃乃 法測  
 柳のそとと 野ハ 出い 寒玉

右百韻四月十八日深川

泉竜院よりく七七日月

追善各満坐

百々日

善子救ハ百日の 裡やとく々 冠里  
 編集の昔を 文中に思ひ出く  
 移りゆく人 やを つも 既と 乃日 沾測  
 日く 千も ちあ せて 百今 のを 秋色  
 乃く 百日 教ひ くと 車盛  
 今日 施僧 即事  
 妻合子 人も 白ひも 孫す 人 音流

波

在而堂其角 氏ハ 寶井の 年四十七日 寺  
 世に 中 一 ぬを とく々 を 二本 板 上行 寺



小室のりて夜臺をなみ知友門人石碑建  
 建じ事をものそむ然りとといともや法も  
 とくあふれあふくせうれあふふよと  
 て深川長慶寺よ芭蕉公羽乃塚あり  
 そふ小像のそく一ヶれ出饅頭をきつく  
 晋子病床りるを眼の達乃乃像一帯を  
 書あそむと廓然不動の月縁のやとん  
 けしけはけりくくせかから和尚開眼の筆  
 紙画して去乃佳城のくふれりあふくく  
 のくすのにくをる月景のけり也又去乃  
 三巻ハ晋子ふふ多席をうけぬのそひハ  
 身、たけくくはる新話をつつと秋景ハ

五味を啗て類棋子を名つてきつて全篇  
 けりける中よ病中もくあふくつあよ空齊  
 けりきみとかなぬ風音松風沾洲夢流とい  
 よりくくはる也乃及古とあつめかへをぬ  
 けりややうく一帯よあさびら也とけりよ  
 けりきよもあふく門あきくはらく也秋をそ  
 けりあふのあふくもくくくあふあふあふ  
 あつたまふ忘日祥月けあふあふいあふ  
 あふもれあふあふあふ晋子あふあふ月よ  
 鐘の切あつてあふあふ艶麗綿紙城あふ英  
 を咀きをあふくく句くの清新米よいあふ  
 真ふ當せ乃一珍藏なるむあふ紙奥のす







日言くと鉄すいふは貝つら  
 老なんとし一多と又ふ家  
 物して汁煮てしるふ膏の上  
 承と自利するつふさの舟  
 花さくつらあ流さくつらすまふなり  
 侍りいふされ箕海苔をけ  
 飛煙のめくつら月れつらつら門  
 持備金と伽藍心持  
 けはるしふおあを持され板道  
 松をと申途り大玉の言  
 さのふさ鍋とくつらつら主  
 あつらく系種くはを焼繰

合 色 洲 佐 嶽 洲 令 佐 松

昔まきものう動るはまの猛  
 ゆくゆくおれ後務のふ  
 ま強ふとことめくおれ地形突  
 悪くおれふ武佐墨の製  
 月代の舟外はあつら君座根  
 漆の言既終るおれを繕く  
 勸学の文子只君ふかこ同く萩  
 小里んの言を漏らしておれ人  
 人歌とお生ぬきて伏猿を  
 家らつらつらの亦化の甲乙  
 美の雪腰をれ危の牛二本  
 つらつら川を吐く曲あ

嶽 色 洲 令 色 霍 令 洲 霍 色 洲 嶽



冠里

不薊と草

徳吊上坐末のれ

春草生は比と晋子十三回

年〜ふ板こそ板愛強き〜如蒿

角法師去りて十三雨琴竹のこ

名の春ハ尺を〜てまた

天上の道眼と〜さん

琴の糸めらりゆ〜ふのふ 楮李

うの字其角とえは旧友鹿岑

一酔ととに一む〜

春雨や足あ〜人蓋の洗りと 波星

沢水や海苔〜流れ〜二む〜 風洗

鹿と角落て増夜や草の種 松残

桶を〜くの〜乃寺の門 楸下







老セぬやまゝお生乃松の花 百船  
帙と申てこゝも少くももの子 南盛

白ふまじと、香こそ長者の大橋カラス山 潭北

去つて今おえし一上戸梨の心総城 晋承

うぐひすや別の利益此報謝舟 我尚

片町とて採て出さる防風賣全 猿栗

獅子响やさるる里乃江痛病角町

むすふまじりくき此弱者少敵牛

いさ花の在と回らや乃小紋帳 蘭破

名のかれ土氣残るかれまじり 李投

ふりいさく依り八專や空りい 李御

まゝこよ一日乃ふかしこころれ 其道

派と吹田探のぬるはくころれ 泉之

川草の萌おれぬ夏や古き 露路周

蛙子の出離まめ南利身延乃 立推

棠のふり誦経とすん今やの 里堂

峰の棠の目くに和讀も新し 素秋

実もとも同や廢乃珠投の房 專之

線香のち澤芳しつか草 百詠

法瑞味嚼ま首はまとい供物 牡仙

連翹やいさかしくいさか供養 松吟

棠の花の膝よふゆるや竹の西 非琴秋田



まがろーのちろろのき草<sup>全</sup>紅且<sup>全</sup>  
長成<sup>長</sup>いか<sup>長</sup>やと<sup>長</sup>野の<sup>長</sup>風中の<sup>長</sup>簾<sup>長</sup>其<sup>長</sup>言

誰も一字のけんお及<sup>長</sup>た<sup>長</sup>ら<sup>長</sup>ん  
何れや<sup>長</sup>後<sup>長</sup>お<sup>長</sup>は<sup>長</sup>ち<sup>長</sup>る<sup>長</sup>へ<sup>長</sup>

是<sup>長</sup>吉<sup>長</sup>や<sup>長</sup>も<sup>長</sup>次<sup>長</sup>て<sup>長</sup>ふ<sup>長</sup>お<sup>長</sup>し<sup>長</sup>蝶<sup>長</sup>乃<sup>長</sup>夏<sup>長</sup>白<sup>長</sup>雲

暮<sup>長</sup>よ<sup>長</sup>や<sup>長</sup>ち<sup>長</sup>の<sup>長</sup>穉<sup>長</sup>も<sup>長</sup>小<sup>長</sup>さ<sup>長</sup>り<sup>長</sup>つ<sup>長</sup>を<sup>長</sup>何<sup>長</sup>虹

等<sup>長</sup>さ<sup>長</sup>法<sup>長</sup>り<sup>長</sup>防<sup>長</sup>風<sup>長</sup>や<sup>長</sup>野<sup>長</sup>か<sup>長</sup>ま<sup>長</sup>に<sup>長</sup>何<sup>長</sup>竜

蓮<sup>長</sup>翹<sup>長</sup>の<sup>長</sup>も<sup>長</sup>ほ<sup>長</sup>家<sup>長</sup>を<sup>長</sup>こ<sup>長</sup>を<sup>長</sup>る<sup>長</sup>の<sup>長</sup>末<sup>長</sup>何<sup>長</sup>文

如<sup>長</sup>意<sup>長</sup>る<sup>長</sup>よ<sup>長</sup>や<sup>長</sup>其<sup>長</sup>智<sup>長</sup>恵<sup>長</sup>を<sup>長</sup>ぬ<sup>長</sup>藤<sup>長</sup>の<sup>長</sup>も<sup>長</sup>梅<sup>長</sup>志

る<sup>長</sup>中<sup>長</sup>お<sup>長</sup>裕<sup>長</sup>ふ<sup>長</sup>白<sup>長</sup>ふ<sup>長</sup>も<sup>長</sup>い<sup>長</sup>も<sup>長</sup>角<sup>長</sup>沾<sup>長</sup>洋

書<sup>長</sup>と<sup>長</sup>の<sup>長</sup>も<sup>長</sup>其<sup>長</sup>末<sup>長</sup>の<sup>長</sup>考<sup>長</sup>を<sup>長</sup>た<sup>長</sup>乃<sup>長</sup>葉<sup>長</sup>葉<sup>長</sup>文<sup>長</sup>丁

空<sup>長</sup>の<sup>長</sup>強<sup>長</sup>ふ<sup>長</sup>言<sup>長</sup>の<sup>長</sup>を<sup>長</sup>ふ<sup>長</sup>く<sup>長</sup>う<sup>長</sup>や<sup>長</sup>亦<sup>長</sup>也<sup>長</sup>ふ<sup>長</sup>ト<sup>長</sup>童

廣<sup>長</sup>宣<sup>長</sup>乃<sup>長</sup>所<sup>長</sup>ハ<sup>長</sup>ん<sup>長</sup>初<sup>長</sup>り<sup>長</sup>す<sup>長</sup>木<sup>長</sup>の<sup>長</sup>芽<sup>長</sup>ら<sup>長</sup>千<sup>長</sup>柳  
朝<sup>長</sup>東<sup>長</sup>風<sup>長</sup>や<sup>長</sup>草<sup>長</sup>い<sup>長</sup>こ<sup>長</sup>り<sup>長</sup>り<sup>長</sup>私<sup>長</sup>を<sup>長</sup>也<sup>長</sup>沈<sup>長</sup>詳  
ま<sup>長</sup>や<sup>長</sup>ら<sup>長</sup>り<sup>長</sup>ぬ<sup>長</sup>山<sup>長</sup>葵<sup>長</sup>は<sup>長</sup>も<sup>長</sup>の<sup>長</sup>幸<sup>長</sup>い<sup>長</sup>巴<sup>長</sup>水  
その<sup>長</sup>ま<sup>長</sup>や<sup>長</sup>文<sup>長</sup>を<sup>長</sup>む<sup>長</sup>ろ<sup>長</sup>も<sup>長</sup>て<sup>長</sup>谷<sup>長</sup>人<sup>長</sup>凡<sup>長</sup>可<sup>長</sup>水

居士十三周より及んで  
るわいしくことごとく毎五句

墨<sup>長</sup>の<sup>長</sup>香<sup>長</sup>や<sup>長</sup>世<sup>長</sup>お<sup>長</sup>も<sup>長</sup>い<sup>長</sup>の<sup>長</sup>幸<sup>長</sup>む<sup>長</sup>と<sup>長</sup>少<sup>長</sup>沾<sup>長</sup>洲  
ま<sup>長</sup>や<sup>長</sup>む<sup>長</sup>ー<sup>長</sup>一<sup>長</sup>字<sup>長</sup>の<sup>長</sup>じ<sup>長</sup>話<sup>長</sup>就<sup>長</sup>周<sup>長</sup>竹  
む<sup>長</sup>言<sup>長</sup>も<sup>長</sup>事<sup>長</sup>物<sup>長</sup>當<sup>長</sup>然<sup>長</sup>る<sup>長</sup>い<sup>長</sup>じ<sup>長</sup>く<sup>長</sup>青<sup>長</sup>城  
名<sup>長</sup>号<sup>長</sup>の<sup>長</sup>香<sup>長</sup>も<sup>長</sup>ま<sup>長</sup>ら<sup>長</sup>め<sup>長</sup>ら<sup>長</sup>て<sup>長</sup>梅<sup>長</sup>硯<sup>長</sup>園<sup>長</sup>女  
こ<sup>長</sup>の<sup>長</sup>矢<sup>長</sup>乃<sup>長</sup>種<sup>長</sup>芋<sup>長</sup>お<sup>長</sup>れ<sup>長</sup>く<sup>長</sup>の<sup>長</sup>如<sup>長</sup>自<sup>長</sup>沈



晉の半の初祖像ありと  
長安寺の墳墓ありと

面壁して四つと足す年つくと  
仙鶴

追加

生死やのこけ男の年八卦  
糸見

石の肌移すも羽列をくもふさか  
秀塘

角芦の白髪もやうぬ恨も  
硯洲

夏深く腫とぬく人眼後  
鶴洲

春も深ぬ十三經のほまぢ  
沾徳

梨もも唇は振る京波  
秋色

さけふ人の人た如と築より  
沾例

古跡又れ同とさま次川面  
晋如

夏語を射れし壺月ふり予の月  
壺月

出むう人山を聲くうの山  
青娥

雲をて人を帰ふにとはる網  
月下

い川揚うと九壩強うと鐘  
貞佐

名物て今も暑き年とす  
蓮之

筆かふしことい知るはるん杯  
只尺

志のこくを繪鳩へ出張る棹此身  
如

虚言伝ふ人て地を早んせ

下



久ほく子に成るも合馬んを在  
 初舞出—て看病の榮  
 樂尼の武士にまゐりて水の月  
 使へくねれ翻乃すそ祈  
 降可とも美只上屋此神の  
 紋日乃をこま廿一日  
 月と後—その蒸れ射贈  
 名 結納て終るともす戸を足  
 一丁の蘊鉄—よもれ保の内  
 行よ油燐と流に別行  
 乃形へわつれも孫人お侍  
 笠事見初糸も清十布五年  
 尺 之 如 下 列 月 之 哉 月 色 法 尺

身ふくく何そくやう毎の幣  
 二階乃劔眉跡川  
 久—さ孤遠糸序ラこの袴  
 以予ぬ柱—寺を逼迫  
 文月よ九月十月峯の月  
 也歌乃くあいかつがう捨  
 祭見はり糸逆髪乃大くい  
 在—をいつのあて註く  
 床縁て膝—つて香脱衣—  
 三の間考もはむの宿下り  
 鮎の子れか—あひ—の歌と  
 じ—の陰よ—  
 尺 月 佐 之 如 列 之 尺 下 如 月 佐



田也骨子ら遺編新補子  
の右様紙色持以て  
物々々の世に好依る  
物は新傳子取いて花  
刺り御百紙得る海  
まゝの心紙との紙込  
たのめらるる丁麻虫也

田也

田也



可もあて年そのいり勢も  
よふハ身も子ハ初也子の殺  
白にては中逢と此白  
のり人ト帝ハ察外  
唯ふとふハ時代ハ創  
後ハ人口亦おれ白地社  
事其ハ一気ハ午とふり

事の白ハ濁も之ハ宗帝ハ  
くやもれ其角ハ濁も之ハ  
に死しく大帝ハ書ハ  
しんはとこも其物  
死し假気也ハ之ハ今  
年十三回也ハ  
之れハ昔ハ下遠編法  
白ハ今ハ此ハ又脚ハ



物とし今此の僅尔退  
かしく時乃の訖河  
程りと事一在利

泊徳跋

享保四己亥稔冬季上浣

江戸日本橋南一丁目

万屋清兵衛版

40  
1798  
1798



